

# 教育セッション

---

## 教育セッションⅡ 臨床化学

---

### 第1日目（5月14日）第2会場（和ホールC）

---

13:50~14:50 どこから教える、どこまで教える？人材育成

司会：和田 哲（和歌山県立医科大学附属病院）

【S-56】 1. 卒前教育の立場から（学校教員）

後藤 直樹（京都保健衛生専門学校）

【S-57】 2. 卒後教育の立場から（病院、衛生検査所管理職レベル）

山中 良之（岸和田徳州会病院）

ねらい

“様々な規模の施設で当直業務や休日業務においても実施されることの多い臨床化学検査であるが、検査を実施する人材の育成に苦慮されることが多いと思います。

自動化、システム化によって卒前教育とは聊か隔絶された現場に配属された新卒新入職員を誤った検査結果を返さないのは当然のこと、検査を実施するプロフェッショナルに育成するために、各施設がどのような人材を求め、どのような教育体系をとっているかなどの現状を知り、理想を考えましょう。”

## 卒前教育の立場から

◎後藤 直樹<sup>1)</sup>  
京都保健衛生専門学校<sup>1)</sup>

どこから教える、どこまで教える？人材育成  
卒前教育の立場から

## 【はじめに】

現在の臨床検査技師学校は大学、短期大学、専門学校で構成されている。当校は、第一臨床検査学科（昼間部 40 名）、第二臨床検査学科（定時制 40 名）。看護学科三年課程（40 名）、臨床工学技士専攻科（24 名）、合計 4 学科の医療系専門学校である。専門学校の立場から、臨床検査技師の卒前教育について紹介する。

## 【臨床検査技師養成校】

現在、臨床検査技師を養成している学校は全国に 83 校ある。内訳は、大学 54 校、短期大学 5 校、専門学校 24 校となっている。近畿地区では大学 8 校、専門学校 4 校で、短期大学はない。

## 【学生の特徴】

第一臨床検査学科の過去 3 年間の入学生は高校新卒者が最も多く、続いて大学卒業後再進学者が多い。平均年齢 19.3 歳、男性 38.3%、女性 61.7%と女性が多い。クラスの雰囲気は高校新卒が多いこともあり、明るく元気な学生が目立つが、その反面、やや社会性が不足している学生もいる。

第二臨床検査学科の過去 3 年間の入学生は、大学卒業後再進学者が最も多く、続いて高校新卒者が多い。平均年齢 24.4 歳、男性 51.3%、女性 48.7%である。クラスの雰囲気は大卒者、社会人経験者が多いこともあり落ちついた雰囲気である。

専門学校に入学してくる学生は 3 年で卒業し早く働きたいという意識の学生が多い。また、第二臨床検査学科の学生は再進学者が多いこともあり、資格取得の意欲は非常に高い。

## 【第一臨床検査学科のカリキュラム】

学校理念である「心豊かな医療人の育成」のもと、臨床検査技師教育に携わっている。

## 1 年生の指導ポイント

- ・学生間交流による仲間づくり

- ・生活と勉強のリズムづくり
- ・高校の理数系科目の復習による基礎力向上
- ・人体の構造と機能についての興味の引きだし

## 2 年生の指導ポイント

- ・専門科目履修による知識、技術の積み上げ
- ・臨床検査技師の役割の理解
- ・医療人としての自覚と責任の考察

## 3 年生の指導ポイント

- ・専門科目履修による知識、技術の定着
- ・日本医学検査学会参加による視野の拡大
- ・国家試験に向けて知識の整理

## 【臨床化学教育の流れ】

## 1 年生の教育目標

- ・臨床検査に必要な器具、機械の基本操作の習得
- ・各検査項目の生理的意義、基準範囲の理解

## 2 年生の教育目標

- ・各検査項目の代表的な測定法の理解
- ・各検査項目の臨床的意義の理解
- ・臨地実習を通して知識の整理

## 3 年生の教育目標

- ・試薬調整から測定、結果の評価と説明まで一連の臨床検査の実施
- ・学内研究発表の体験

## 【おわりに】

専門学校で臨床化学教育を担当して感じることは、学生の化学離れである。1 年生の教育目標に書いた通り、入学後は中学・高校の理数系科目の復習から授業が始まる。mol 計算が苦手であったり、一部の学生は対数を聞いたことがなかったりと特に化学に関してはスタートラインの低さが伺える。その結果、臨床化学の授業を学ぶ前に“化学”という単語に壁を感じ、苦手意識をもっている学生が多い。このような学生を臨床で必要とされる臨床検査技師にまで教育できるよう、ご意見をいただきたいと思う。

京都保健衛生専門学校 臨床検査学科  
075-801-2571

## 卒後教育の立場から

◎山中 良之<sup>1)</sup>

医療法人 徳洲会 岸和田徳洲会病院<sup>1)</sup>

社会において臨床検査技師が活躍できる場所は病院、検査センター、研究所など様々な分野があるが、最も臨床検査技師がその能力を発揮できる場所は、病院であると私は考えております。しかし、その病院も臨床検査技師が1名の施設から100名以上が活躍している施設とさまざまであり、その規模や主となる診療科によって、必要とされる臨床検査技師の能力は自ずと変わってきます。

今回のテーマである『どこから教える、どこまで教える？人材育成 卒後教育の立場』では当院での取り組みと私的見解である理想の検査技師像をお話させていただきます。

まず当院の概要ですが、大阪府岸和田市加守町にある高度救命救急センターを有する341床の高度急性期施設で現在、臨床検査技師は37名が在籍し、33名が臨床検査科に所属しております。当院においては毎年、複数名の新卒者を迎え入れ新人教育として約1年間をかけております。新人教育の詳細に関してはセッションの際に述べさせていただきます。

臨床化学担当者としての教育は、データが読める（エラーデータを見出す）こと分析装置の安定稼働（精度管理）、試薬検討能力（パラメーター入力、基礎検討、検討結果の解析）等が考えられますが、昨今、検査システムによる自動検収（再検）システムの導入による省力化や、分析装置の進化に伴ってパラメーター入力がCD等を読み込ませるだけの分析装置もあり、以前に比べると業務における学習の機会が減ってきていると感じております。ましてや試薬メーカーのランニングマンによる代理検討などもあり現場の臨床検査技師自ら基礎検討を行っていない施設もあると聞きます。このような施設の方は「私の担当は臨床化学です。」と口に出して言えるでしょうか？臨床化学の責任者として働くのなら、確かに基礎的検討を行いにくい分析装置もありますが、出来ない理由を探すのではなく出来る方法を考え、自施設の装置の特徴を知り臨床が必要としている検査項目などを考える必要はないでしょうか。

次に昨今の臨床検査技師に求められる力はなんでしょうか？この質問にも答えはたくさんあると思いますが、共通した答えとしてコミュニケーション力の必要

性・向上は多くの方々にご賛同頂けるのではないのでしょうか。今回のテーマである『どこから教える』の答えは、このコミュニケーション能力向上だと私は思います。この能力向上のために当院ではグループワーク形式の教育を行っております。具体的な方法はセッションの中でお話しさせていただきます。

ここで私個人の理想とする臨床検査技師像を述べさせていただきます。よくスペシャリストかジェネラリストか等と議論されることがありますが、皆さんはどちらが理想の検査技師と思われるのでしょうか？この質問も100名にお尋ねすれば100通りの答えが返ってくる質問だと思います。でも自施設に限って考えれば自ずと答えは出るはずで。当院においては、これまでスペシャリストを目指して運営を行っていました。これは正しい選択でありました。しかし最近では、いくつかの問題も抱えており、この問題点はセッションの中でお話しさせていただきたいと思っております。

では理想の臨床検査技師像とはなんでしょうか？それは周囲から信頼される存在になることだと思います。同僚・上司・部下・医師・看護師など院内のすべてのスタッフ、そして患者さんから信頼される存在になる事だと思います。それには医学的知識はもちろんコミュニケーション力や接遇・一般常識などあらゆる面で人間性を高める必要があると思っております。

今回のセッションでは理想の臨床検査技師を育成する方法を会場の皆さんと一緒に考えることができると思っております。

【連絡先 072-445-9915（内線 4867）】